

揺れる

西垣 みゆき

へアピンカーブを登りきって、バスが白樺湖畔の〈ホテル高原〉に到着したのは、四時少し前だった。

日暮れの早い秋の日も、まだ落ち切っていないくて、青く澄んだ湖にさざ波が立っていた。

植え込みのナナカマドは、葉陰に赤い実が鈴生りに付いている。

ガイドがドアを開けるのを待ちきれない様子で、城東老人クラブの会員は、降車口に列を作る。荷物を下ろす者と、いち早く降車したい人がごっちゃんになって、出口付近は混雑がひどい。

白山ミチルが城東老人クラブの旅行を担当するようになって、十年近くなる。毎年春の日帰り旅行と、秋の一泊旅行の添乗をしているので、多少の変

更はあるけれど、このバスの殆どの客が顔見知りである。

客の荷物を柵から降ろしながら、忘れ物がないか、確認して行く。

通路に並んでいる客の中ほどから、大きな声が聞こえた。

座席の上に乗って、小柄な坂下勇が荷物を降ろしている。声の主は妻の芳江らしい。

「もう一つ、蜂蜜とジャムの入った袋、柵の中に忘れてないの？よく見てもよ」

芳江の甲高い声を聞くと、ミチルの胸が波立つ。夫に命令口調で物を言う芳江が、もう少し優しくなればいいと思うけれど、添乗員が口をはさむ場ではないと、心を鎮めた。

四十二歳のミチルには、老人クラブの会員は親か祖父母の年齢に近く、少しくらいの我儘は微笑ましいが、芳江の頭に響く声は、苦手である。

「そんな物は降ろさなくてもいいの。添乗員さんに任せなさい」

芳江の剣を含んだ声に振り返ると、勇が花柄のバッグを、後ろの席の高居歌子に渡そうとしていた。歌子が手を引つ込めると同時に勇が手を放し、鞆は通路に落ちた。

「すまん」

歌子を見た勇の顔が赤くなっている。芳江は知らん顔で通路の列に並んで降り、勇は荷物の殆どを持って、芳江の後に続いた。歌子は黙って鞆の埃をハンカチで払っている。

「嫌な人ね、旦那にあんな態度は見苦しい」

歌子と並んで座っていた小春の声が、聞こえた。

馴染んだロビーに入ると、渡した部屋割りに従って、客は夫々仲居に案内されてエレベーターを待っている。ソファに腰掛けて靴の中を探っている歌子に、靴の中は大丈夫かと声をかけた。

「ありがとう。何ともないみたい」

歌子は、赤く塗つた下唇をちよつと囁んだ。

ミチルはフロントに足を運ぶ。支配人の桂河が、親しみを込めた笑みを浮かべて出迎えた。何度来ても、桂河の笑顔を見ると心が休まる。

「今日はお早いお着きでしたね。いつもご利用有難うございます」

「ええ、城東老人クラブさんは、急ぎの旅行は嫌がるの。今日は諏訪大社と北澤美術館、明日はオルゴール館とビーナスライン。時間にゆとりがあるので、添乗員は助かるわ」

「北澤の、ひとよ茸のランプ、素敵

ですよ。いつものブラックでいいですか」

話しながら、桂河はコーヒーを頼み、ミチルをソファに案内する。支配人の流れるような一連の動きに、ミチルはこのホテルの心地よいサービスの原点を見ていた。自分の仕事の参考にもなる。

高原ホテルに団体客を案内して来たのは、もう十回は超えているだろう。ミチルの本来の仕事は、添乗員ではなく、営業係長の肩書を持つている。部下は四人だけれど、国内旅行の企画から営業まで、老人クラブメインの団体募集業務をこなしている。

困りごとですぐ対処でき無理の利くホテルは、自分の持ち駒として何度も送客することになる。

「宴会時間は、六時と伺っています
が、変更はございませんか」

「ええ、明日の出発は九時だから、

朝食は七時三十分にして下さい」

希望事項など、桂河との打ち合わせを済ませて、荷物を添乗員部屋に置き、直ぐに客室を見て廻る。

バス一台、四十三人で十室だから、今日の部屋廻りは楽だと思いつながら、最初に青木会長の部屋をノックした。

「丁度良いところに来てくれた。

306号室の亀谷さん夫婦のところ
に、もう一人女性を入れたいんだけど、
ホテルの人に頼んでくれないだろう
か」

青木は、気心の知れたミチルを気楽
に使う。

「さつき亀谷さんが来て『自分の腰
の調子が良くないので、武子さんに家
内の世話を頼んだから、同じ部屋にし
てもらいたい』と頼まれたんだ。武子
さんも承知しているし、年寄り同士だ
から問題ないと思つてね。これが十年
若ければ、僕も許可しないけど」

意味あり気に笑う。

亀谷の妻は、足が不自由で杖が手放せない。城東老人クラブでは、夫婦別室の部屋割りだが、夫の光男が妻の世話をするというので、三年前から特別に二人部屋を取っている。

青木会長の話によると、武子はヘルパーをしていて、七十歳の今も現役で働いている。亀谷の妻も時々世話になつてゐるらしい。

「分かりました。では、三〇三号室が一名減つて女性四名に、三〇六号室が、男性一名と女性二名ですね」
ミチルはその場でフロントに電話を入れる。

「あなたに頼むと、話が早くて気持ちがいいねえ。旅行会社も多いけど、僕がミチルさんの会社を遣うのは、どんな事も任せて安心だからだよ」

青木は、同室の男性達を振り返つて同意を求めらる。

団体旅行の幹事は、日にち決定の前に、ミチルが添乗できるかどうか、尋ねてくる。

「白山さんが添乗してくれるから、グリーンツーリストに頼むんだよ」

と念押しする者もいる。仕事が詰まつて来ると困ることもあるけれど、バスや列車の中で、次の計画や勧めたいコースなどの営業ができるので、極力添乗するようにしていた。

企業の慰安旅行は、ここ数年不景気のせいで減少した。その点、老人クラブは毎年恒例の旅行を楽しんでいる。競争相手のエージェントは多いが、最肩にしてもらえば、他社に変えられることはあまりない。

少人数の城東老人クラブだが、青木会長は、地区連合の役員も兼ねている。年に一度、七台のバスを連ねる連合会一泊旅行の決定に、力のある役員なのだ。エージェントの立場もよく心得て

いて、バス一台当たり四十名以上の乗車になるように参加者募集してくれ、ミチルにはありがたい存在だった。

部屋廻りを済ませて、宴会場に行く。小宴会場ながら、頼んでおいた舞台とカラオケセットが整えられている。老人クラブの会員には、舞台が欠かせない。舞台の上と畳では、高揚の度合いが雲泥の差らしい。

膳の料理を確認していると、いつの間にか、桂河が後ろに立っていた。

「ご注文頂いた通り、フライは天ぷらに代えました。刺身は、宴会案内放送の直前に、冷たいものをお出しします。天ぷらと茶碗蒸しは、お席に就いてから温かいものを出させます」

「ありがとう。支配人のお陰で、高原ホテルさんに宿泊の時は、大船に乗った気持ちで安心なんです。感謝します」

ミチルの言葉に、桂河は微笑んだ。

「こちらこそ、白山さんには沢山のご送客をいただいて、ありがとうございます。お気付きのことがありましたら、何なりと……」

そして、
「営業の他に添乗までしておられると、大変でしょうね。お客様とエージェント、両方の意見が聞ける、白山さんのような方が、私共には一番ありがたいのです」

桂河はミチルの立場をよく心得ていて、仕事が上手く運ぶように、多少の無理は聞いてくれる。その上、馴染みになっても、言葉遣いや態度を決して崩さないのも、ミチルが桂河に信頼を寄せる理由だった。

ホテルマンも様々で、何度も利用しているうちに、ひどく馴れ馴れしくなったり、中には失礼な誘いをしてくる者もいる。そんなホテルに限って、手落ちが多い。

「添乗も私の営業の内ですから。現地を確認する意味でも、必要なことだと思っっているのですけど」

ふと、困ったような翔の顔が浮かんだ。

営業と添乗で、翔のマンションに泊まれる日は少ない。一緒に住もうと何年も前から言われているのだが、ミチルは返事を伸ばしている。時間に不規則な仕事柄、ひとり住まいの方が自由が利く。同居すれば何かと翔に気を遣うことになりそうで、煩わしさが目に見えるようだった。

今の仕事で性格に合っていて、不規則な時間も、交渉事も苦にならない。時間のできた時に翔と会う。それが二人の関係に一番良い選択だと思っっている。

宴会場を離れて部屋に戻り、会社への業務連絡のあと、翔に携帯電話を架ける。

「何かあったの？今日は早いじゃないか」

翔はちよつと驚いたようだった。

「今日は早く着いて、少し時間ができたから。たまには翔の声も聞かないからね。明日の到着も早そうなの。明後日は休みが取れるから泊まりに行くわ」

「いや、悪いんだけど、明後日は法事で実家の方に行く事になっているんだ」

翔は口ごもりながら言った。

「あら、この前は何にも言っつてなかったじゃないの。急に決まったの？誰の法事？」

「ちよつと遠縁の、母方の……」

ミチルが休めないと思っつていたからと、聞き取りにくい声で呟いた。

「遠縁の法事なら休んじやえ」

ミチルが冗談めかして言うのと、思いがけず強い口調で、

「もう返事をしたんだ。いつも君の

都合にばかり合わせていられないんだよ。じゃあ、またこの次に」

返事を待たずに電話は切れた。ミチルは、頬を冷たい風に撫でられたような気がした。

忙しさにかまけて、たまの休日に翔と会うことさえ、面倒に思うことがある。付き合ってから五年、忙しいミチルのスケジュールに合わせて、二人の時間を作る習慣が何となく続いて、公務員の翔が、自分の都合を主張することは、殆どなかった。それだけに、今日の電話は少しシヨックだった。

ミチルの時間が空けば、いつでも翔のマンションに行つて、愚痴をこぼし、翔に抱かれて眠る習慣、それが崩れそうな予感が、ミチルの心を重くした。

予定通り九時に宴会が終了して、別室に用意されていた食事をとる。着替えをして明日の予定を確認し、支払い

クーポンと、今日の日記に記入する。

大浴場へ行つたのは十一時になつていた。

脱衣場に人影はなく、スリッパが二足脱いである。

浴室のガラス戸を開けると、湯船の中にいた二人が、驚いたように振り返つた。歌子と小春だった。

カランの前で体を洗っていたら、

「白山さん」

と二人が手招きをしている。急いで掛け湯をして、湯船に浸かつた。

「今日の事、どう思つた？」

歌子が尋ねる。

「あの靴を落とした事ですか」

頷いて歌子は眉間に皺を作つた。

「私、本当に困っているのよね。坂

下さんの事、何とも思っていないのよ。

それなのにあのおばさん、私と旦那が何かあるみたいに焼もちを焼くのよ」

「歌子さん、綺麗だから」

小春が湯に浸した掌で、自分の頬を叩く。

「そんなんじゃないの。私は潔白よ」

歌子は色白の体をくねらす。七十近くなつても、ほっそりした体の線はまだ綺麗だった。太つて下腹の皮膚がエプロンのように垂れている小春が言うことによると、子供を産んでいない歌子は、綺麗で当り前なのだそうだ。

小春は八十に近く、歌子とは十歳くらいの開きがあるが、いつも一緒にいる所を見ると、ウマが合うらしい。容姿も年齢もかけ離れているから、競争心を持たないのかも、と見ているが、それだけではなく、お互いに持っている物を共有しているような、錯覚を楽しんでいるようにも思える。

ミチルには、老人になつた自分の姿は想像できないが、小春のような姿になる前に死にたいと、本気で思う。けれども歌子を見ていると、自分もあま

り衰えないで、年をとれそうな気がする。

「坂下さんは大工さんだから、家の傷んだ所なんかを直してもらっているの。ちゃんとお金は払っているわ」

歌子は、ピンクのマニキュアの指を湯の中でマッサージしながら言う。

「あなた、坂下さんに奢ってもらったんでしょ。お好み焼き」

小春は肩で歌子を押し、入口に目を遣った。

「あれはね、いつも仕事をさせて貰っているから、御馳走したいって、坂下さんが。だから遠慮してお好み焼きにしたの。あの人、奥さんに締められてるから、お小遣いも少なそうだし」
それを見ていた人が、坂下の妻に注進したのだと、小春が肩を疎めた。

「お好み焼きくらいでカリカリされたんじゃたまらないわ。わたし、色んな人から御馳走になっっているわ。奢る

方も楽しいのだし、残り少ない人生を、窮屈に暮らさなくてもいいと思うの」

寡婦になつて十五年という歌子は、自分を磨きあげて人生を楽しんでいる。それもひとつの生き方だろう。少々自信過剰で、女から見れば好まれるタイプではないかも知れないが、正直で可愛げがあると、ミチルは思う。

「そんなに大した男でもないのに。奥さんも、そんなに亭主が大事なら、自分も身綺麗にして、紐でも付けておけばいいのにねえ」

小春は体を揺すつて豪快に笑った。
「でも、坂下さんの旦那さんはいい人よ」

歌子は肩を持つ。坂下を何とも思っていないのかどうか、ミチルには判断が付きかねる。

小春がしみじみと言う。

「わたしは男なんぞ、そんな面倒くさいものは卒業したけど、人の色恋話

は面白いわ。卒業して見えて来るものも沢山あるのよ」

ミチルに向かって片眼を瞑った。

二人はミチルを呼んだだけで、本当のところ、世間話をしたかっただけかも知れない。ミチルは中腰になって、湯船をそつと離れた。

大浴場の前で、男風呂から上がった三人の男性と鉢合わせした。

亀谷と同じ町内の米村が、厳しい顔でミチルを睨んだ。

「何であの三人を同じ部屋にしたんだ。今、風呂の中で聞いて吃驚した」

「亀谷さんのことですか。ご主人の腰の調子が良くないので、いつも介護をして貰っている武子さんに、お世話をお願いしたいと」

「亀谷が言ったのか」

「いえ、会長さんが」

「亀谷光男と武子は、前から噂があるんだ。そんな事も知らんで、よく会

長をやっているもんだ。間違いがあつたらどうする心算だ」

風呂上がりの艶の良い顔に、太い血管が浮いている。

「間違いはないんじゃないかと……」

ミチルは八十歳になる亀谷の、皺の多い顔と痩せて胸板の薄くなった体つきを思い浮かべた。

「ふん、あなたは何にも分かつて無い」

米村は小馬鹿にしたようにミチルを上から見下ろした。

「もう二、三十年したら、今の僕たちの気持ちが少ないは解るだろう。年寄りは何もかも枯れて行くのが当り前だと、僕もあんたの年ごろには思っていた」

連れの男が、濡れタオルで頭を拭いて、

「わしも、親父が再婚すると言った時『そんな年になって何を考えておる

んか。世間で笑われるようなことは

しないでくれ』と諦めさせた。親父は六十八だった。それから十年で死んだけど、今から思えば、かわいそうなことをしたと思うよ。例え十年でも好き

にさせてやればよかつた」

目を落とした。

「亀谷が独身なら何も言わん。しかし今更、部屋を変えることは出来ないだろう」

米村は、ミチルの目をじつと見た。

「けど、老人を馬鹿にしちやいかん。色の道は死ぬまで分からん。あんたも気を付けた方がいいよ」

最後は頬を緩めて、米村は連れの男たちを促し、去つて行つた。

ミチルは暫く呆然と立っていた。長い間老人クラブの仕事に携わつて来て、何もかも分かつた氣になつて来たが、人間の生き方は様々で、形通りの分類は到底できない。

老人は人生を去ろうとしている者で

はなく、今を生きようとしている人。体に熱い血を隠し持っている人々なのだ。

老人になるのは、遙か遠い将来だと思つていたのに、たつたの二十数年で、今日の旅行の参加者と肩を並べる年齢になるといふ現実に氣付いて、ミチルはため息をついた。

旅行業専門学校を卒業してから、二十年経っている。年月は目まぐるしく過ぎて行つた。これからの二十年をどう過ごすか、改めて考える時期になつたのだと思つた。

次の朝、それとなく様子を見ていたが、武子は、亀谷の妻の乗降に手を貸し、バスの中では、並んで話をしている。変わった様子はどこにも無かつた。

城東老人クラブの添乗を終えて、バスが車庫に着いたのは七時十分前だつ

た。コースによつては九時になることもあるので、楽な方である。にも拘らず、ミチルは疲れを感じて家に帰った。

こんな時に翔と会えば、気分転換になるので疲れを忘れてしまえる。ミチルの中で、翔は無くてはならない存在になつていた。

2LDKの中古マンションを、四十歳になつた記念に手に入れたが、翔の機嫌を損ねて、暫く口を利いてくれなかつた。仕事が面白くて、結婚は考えられない時期だつたし、住んでいたアパートは、建て替えるので出て欲しい、と大家から言われていた。

新聞広告で見つけ、翔に相談なしでひとりで見に行つた物件は、地下鉄に近い閑静な場所にあつた。建築してから三十年経つていたので、思ったより安価だつた。同年輩の、子供を連れた主婦と話をするのが苦手だつたから、住人の殆どが年配者なのが何より気に

入つた。

両親の残した屋敷を処分した時、兄と分けた金と、預金をはたいて支払いを済ませた。

「よく調べもしないで買ったのかい。君の大胆さには呆れるよ。僕に相談してくれたら、もつといい智恵を貸せたのに」

後になつて翔に言われたが、相談したら、同居か結婚を持ちだされ、マンションを買うことは到底出来なかつただろう。

両親が早く亡くなり、兄は家族を置いて単身赴任している。実家のないミチルは、自分の家と呼べるものが欲しいと、いつも思つていた。念願がやつと叶つたのだつた。

定年退職後、故郷で地域の世話役をしている両親がいて、いつでも帰れる場所がある翔には、こんな気持ちは多分分からないだろう。そう思つて、住

まいに拘る自分の気持ちを、敢えて説明しなかつた。

翔が心配した程の事もなく、住み心地はとても気に入つている。預金は無くなつたが、共益費や税金を払つても、アパートの家賃より月々の出費が少ななし、退去を迫られることから解放されて、気持ちが軽くなつた。

洗濯機を回し、熱いコーヒーを淹れる。

テーブルの花が萎れていたので、ペランダのアイビーをひと節折つて、一輪さしに入れた。シャワーを浴び、洗濯物を干す。

ソファアに掛けて読みかけの唯川恵を開いたが、ハードカバーが掌に重くてすぐに閉じてしまつた。

翔に電話したいと思つたけれど、実家に帰つているのだから、何だか気が重い。そのままベッドに入り眠つてしまつた。

目覚めたのは九時を過ぎていた。澄んだ青空が広がっている。

布団を干してから、翔が留守の間に掃除をして置こうと思い付いて出かけた。地下鉄に乗れば十五分で着く。

合鍵でドアを開けると、翔の部屋のおいがした。自分の部屋との微妙な違い。それは一緒に住んでいない証しなのだ、ふと思ひ、翔のいない部屋に忍び込んだような後ろめたさが胸を過った。

ミチルは勢いよくカーテンを開け、窓を開く。締めきっていた部屋が呼吸をし始めたようだ。

急いで出かけたらしく、ベッドは抜け出したままの形に膨らんでいて、ジャマの上着は布団の上に、ズボン キッチンの椅子にだらしなく引つかかっていた。

布団とベッドパットを、ベランダの竿にかける。軒先のピンチハンガーに、

下着がぶら下がっている。シートとジャマを洗濯機に放り込みスイッチを入れる。

出来上がるまでひと休みしようと、湯沸かしの電源を入れ、椅子に掛ける。

キッチンの籠に、見慣れない保存容器が伏せてあるのが目に付いた。綺麗に洗って艶のある白い表蓋に兎と月がプリントしてある。もうひとつは、黒の容器にスキのプリントで、ひと重ねの弁当箱らしい。

最近メタボ気味だと言っていたので、弁当を持って行き始めたのかも、と思ったが、どう考えても男の翔が好む模様ではない。それに朝寝坊の翔が、二段重ねの弁当を作るとも思えなかつた。そういえば、干してあつた靴下も、ミチルの知らない模様だつた。

自分の知らない、翔の世界が広がっているようで、不安を覚えた。出来れば翔の隅々まで知っていたい。

自分だけが知らないで、目隠しされているようなことは、我慢出来ない。

結婚を伸ばしているのはミチルの方だし、長い付き合いとは言え、翔に対して何の権利もない。自分は束縛を嫌っているのに、心のどこかで、翔を都合よく縛りたいと思つている。いつでも今のままでいいとは思つていないが、今の状態が居心地良いのは確かだ。

今度翔と会う時には自分の素直な気持ち聞いて欲しい。それまでに、自分の心の整理を付けなければと思う。

洗濯物を畳み、ベッドメイキングを終えて帰宅したら、三時になつていた。

翔から連絡が入らない。携帯を掛けたけれど、繋がらなかつた。昨夜帰つていれば、ミチルが部屋の片づけをしたことが分かるだろう。そんな時、翔は電話で律儀に礼を言ってくる。

へ今日は日曜日だし、もう一泊したの

かも知れない」

ミチルは来春のパンフレットを三種類、ファイルから抜き出して、車を出した。

城東老人クラブの、青木会長の自宅を訪ねると、剪定鋏を持った青木が、庭木の下から顔を出した。

「やあ、一昨日は御苦労さん。会員は皆喜んでくれたよ。お茶でも一杯飲んで行きなさい。丁度一服しようと思っていたところだ」

縁側に案内されて、日向の座布団を勧める。

「ところで、米村に何か言われたらどう」

青木の目が笑っている。告げ口になりそうだと思うが、青木は全部知っているようだ。

「ええ、亀谷さんの部屋変えのこと、少しだけ」

「あいつにも困ったもんだ」

大して困ってもいない様子で、傍の茶箆筒から、菓子を出して勧める。

「これ、白樺湖のですね。頂きます」
青木はミチルの食べる様子を嬉しそうに眺めていたが、

「米村も、根は悪い奴じゃないんだ。僕の幼馴染みだね。顔が悪いから皆が怖がる」

ミチルは茶を噴き出しそうになった。青木と話していると心が和む。

「亀谷のことは僕も知らなんだ。だけど、知っていても知らん振りをしただらうなあ。本人同士が納得していたら、傍がとやかく言うことでは無いだらう。この歳になって子供が出来る訳でもないのだから」

そう思わんかねと、悪戯っぽい目で顔を覗き込む。

青木に合わせて頷いたものの、本当にそれでいいのか、答は出ていない。清濁併せ吞むという言葉、学生時代

に習ったが、青木のような人のことを言うのだらうか。

煙に巻かれたまま、庭のコスモスを見てみると、紋黄蝶の番が、纏れながら青い空に吸い込まれて行った。

「来春の日帰り旅行、持って来たんだらう。見せなさい」

青木との話は早い。

「秋は信州でしたから、西の方ではどうでしょうか」

京都、伊勢、奈良と並べたコースをざっと眺めて、

「日帰りだし、年寄りばかりだから遠いところは敵わん。京都や奈良もいいけど、春は道が混むし、よし、伊勢にしよう。斎宮博物館へ行つて、伊勢神宮。昼ご飯はいつものように少し良くしてよ」

青木は、ミチルの湯呑みに茶を注ぎ足した。

連合会のコースも、早く決めたいと

言う。

下相談をして、会議を円滑に進めた
いのだ。

連合会に出席する会長は、他に十二
名いて、青木が連合会長をしている。
青木のOKが出たら決まったようなも
のだが、その後、打ち合わせをしたコー
スを他の会長に納得してもらえるよう
に、一軒ずつ説明して廻るのも、ミチ
ルの大切な仕事である。下相談の話が
上手くいかないと、採め事になりかね
ない。

来週持参すると約束して、腰を上げ
た。

門を出て車に乗り込もうとしたら、
米村に声を掛けられた。会いたくない
人物である。しまったと思つたが、先
日の事があるので、急いで車を降り、
「先日は有難うございました」
と頭を下げた。

「これから何処へ行くの」

今日の米村は機嫌が良さそうだ。目
を細めている。咄嗟の事なので、上手
い逃げ口上が出てこない。

「今日は休日なので、家に戻ります」
「丁度良かった。キャロットまで乗
せてくれないか。この間の連中と、待
ち合わせしているんだ。コーヒーを奢
るからさ」

助手席のドアを開けて、米村はもう
乗り込もうとしている。ここで断ると、
話がややこしくなると考え、
「御馳走になりませう」
ミチルは元氣よく応えた。

喫茶キャロットには、信州旅行に参
加した顔馴染みの男性二人が座つてい
た。ミチルが顔を出すと、

「米村さん、お安くないね」
連れの男たちが相好を崩す。米村は
満更でもない様子で、

「今日のコーヒーは俺の奢り」
と、指定席らしい真ん中の椅子に腰

を下ろした。そして、カウンターに向
かい声をかける。

「ママ、この席の四人分、俺のチケッ
トを切つておいてよね」
女中は笑つて手を挙げる。

「この間はすまなかつたねえ。白山さ
んの責任ではないのに、大きな声を
出してさ。昨日青木から説教を喰らつ
たよ。人の事に口を挟み過ぎるつて」
ミチルは笑つて首を振る。

「米村さんは正義感が強いんですよ。
間違つた事は、放つて置けないんです
ね」

仕事の上で、胡麻すりも、時には必
要なのだ。米村はミチルの言葉に勢い
を得たようだ。

「青木はね、俺の一級上で勉強もよ
くできまし、小学校の時から頭が上が
らないんだよ。だけど、亀谷の奥さん
が、何も知らないで騙されているのは、
見ていられなくてね」

分かるよと、男たちは口々に言う。
米村は、優しい男なのだ。

「かわいそうと言えば、坂下勇さんも女房に敷かれているよなあ。人前であんなに酷く言われても、何にも言えないだろう。僕なら我慢できないよ」

男の一人が言う。

「ああ、あれは自業自得だ。あちこちの女に声をかけて廻るから、芳江さんだって腹が立つんだ。夫婦喧嘩は犬も食わないってやつさ」

米村は坂下のことを、冷たく言つてのけた。

「でも、真つ黒で皺くちやの婆さんでは、他の女に走るのも仕方がないよ。女房にも責任があるだろう」

もう一人が苦笑いをする。米村は、「女が綺麗になるのも、汚くなるのも亭主次第。髪を切つても気が付かないようじゃ、女房も手入れをする張り合いが無い。な、そうだろう」

ミチルの相槌を求める。

男は幾つになつても、女に對してたわないとミチルは思う。時には大声を出したり、体力で威嚇するが、本当は気が小さくて、見栄つ張りな生きものようだ。

携帯が鳴つた。翔からの着メロへいきものがかりの『今走り出せば』

「失礼します」

と言つて、店の外に出る。

「ありがとう。掃除してくれたんだね」

二週間会っていないだけなのに、白樺湖で慌しく切れて以来の翔の聲が懐かしい。

「ごめん、すぐ掛け直す」

切つて、米村に、会社からの連絡が入つたので、と断つて車に乗つた。

誰もいない所で、ゆっくり翔の声を聞きたかつた。五分ほど走つてテニスコート脇の空き地に停車する。

呼び出しているのに、翔は出ない。一分後に掛け、三分ほど置いてまた掛ける。

「ただいまでんわにできることができません」

無味乾燥な声が流れる。傍にいないに捕まらない。もどかさで苛立つ心を鎮めようと、エンジンを止めて目を瞑つた。

テニスラリーの音が響いてくる。間隔を置いて、ポーン、ポーンと聞こえる音はのどかで、何の迷いも無いように響く。

翔の電話を待つて落ち着かない自分と、ボールを打つ音の中にさんざめく笑い声。

落差の底辺に自分がいる寂しさが込み上げる。違う世界を仕切つているものを外すことは、できるのだろうか。案外簡単かも知れない。翔の声を聞けば。

通話ボタンを押して、直ぐに「はい」と翔の声。

「どうしたの、何度も掛けたのよ」

「ああ、待つてたんだけどね、他所から電話が入ったりして。君との間は、いつもこんなだね、釘の掛け違いのよ。今忙しくないの？」

「全然。今まで仕事の話をしていただけ、もう大丈夫。翔は？」

「三十分程で出かける」

「いつ帰るの」

「分からない」

会いたいという言葉を呑みこんだ。ミチルの釘も、釘穴を探して彷徨っている。

「こんな事言うのはあれだけど、ミチルは忙しいから、俺の掃除までしなくていいよ」

何だか拒否されているような気がする。

「翔がいなくて一日空いたから。あ

まり天気が良かったので、布団を干しなくなったの」

軽く言った。翔の言葉が途切れた。

微妙な間があつて、

「一度きちんと話をしたいんだ。今日は無理だけど、今度ミチルの休める日に」

「遅くなつてもいいなら、マンションに行くわよ。明日にでも」

「いや、そんな短い時間では話にならない。また電話くれよ」

急ぐから、と通話が切れた。

今まで翔に向き合ったことが、こんなにあつただろうか。気ままに会つていた時は、一緒にいても頭のどこかで仕事の事を考えていた。仕事の隙間に翔との時間を埋めて、バランスを取っていた気がする。今、何かが変わろうとしていくようだ。翔も、ミチルも。

気軽に会えなくなつて、ミチルは翔の事しか考えられない。

翌週、ミチルは磯部温泉で一泊し、妙義神社に来ていた。

二泊三日の旅は、上信越道が出来てから、楽なコースになった。客は郊外の老人クラブで、旅慣れている。近くの観光地は行き飽きたと、遠方を希望した。バス三台で、乗客は百十八名、添乗員は一人が普通だが、九月に入社した友香を、見習いに連れて来ていた。神社の石段はかなり長い。総門までおよそ百段、本殿まではそこから数百段続く。それでも、半数近くが本殿を目指す。ガイドに任せて休憩時間に充てる添乗員は多いが、ミチルはよほどの事が無い限り、付いて行くことにしている。友香にも、勉強の為だから一緒に行くようにと促した。

友香は、七センチのヒールの靴を履いている。

「添乗する時は、五センチ迄よ」

と言ったが、二十歳の友香は、
「慣れているから大丈夫だと思いま
す」

けろりとしている。

本殿の周りにグリーンツーリストの
客がいないか確認して、急いで階段を
下る。出発する時刻になって、三両目
にいた友香が、足を庇いながら、先頭
車両まで歩いて来た。

「お客さんが集印帳を忘れたので、
待つて下さい」

「で、何て名前の方」

「今、歩いて行かれるあの人」

腰を曲げた女性が、一生懸命階段に
向かつて歩いている。

「何であなたが行かないの」

「足が痛くて……」

半分泣きそうになっている。

「私が行くわ。あなたは先頭車両に
乗って、碓氷峠で三十分休憩を取って
ね」

それで追いつけると計算した。
言い置いて、女性客の後を追いかけ
た。

本殿往復の後、百段近くを駆け上る
のは、さすがに辛い。集印帳を受け取っ
てバスまで急ぎながら、この階段が駆け
上げられなくなった時が、添乗を止め
る時期だと思った。

六十歳の定年までは、とても無理だ
ろう。第一、客に心配や同情をされる
ようでは、それだけで失格なのだから。
動き出したバスの中で、息を整えな
がら考える。

「力を入れ過ぎると、今に息切れす
るぞ」

シーズンの、トップの売り上げを達
成した時、課長に言われたことがある。
友香の靴擦れを思い出して、笑みがこ
ぼれた。

翔と結婚したとして、今のままでは
両立する自信がない。仕事は好きでも、

十年の充実感と、翔との一生の付き合
いを引き換えにはしたくない。仕事の
やり方を、徐々に変えて行かなければ
ならない。

自分が来なくても、顧客に喜んで貰
えるような社員を育てなければ、いつ
までも自分が先頭に立っているのは、
限度がある。

目を上げると、バスは紅葉の碓氷バ
イパスを快調に走って行く。遅れた時
間を取り戻すように、運転手が心もち
スピードを上げたようだ。

昼食場所の軽井沢で、ミチルはタク
シーを呼んで、友香に二万円渡した。
「ソックスとスニーカーを買って
らっしゃい。その足で、添乗は無理で
しょう」

草津の宿泊場所に、靴屋が開いてい
るとは限らない。少しでも早く、友香
を足の痛みから解放しないと、仕事の
見習いが上の空になる。

二十分で友香は戻った。ソックスとスニーカーを履いている。

「助かりました。本当は裸足で歩きたかったくらい痛くて。お金は給料から引いて下さい」

笑顔で釣銭とレシートを差し出す。

「初添乗のお祝いよ。私からの」

「本当ですか。ありがとうございます」

悪びれない友香の笑顔は、いい社員になるだろうと、期待が持てる。自分にもあつた入社当時の希望と緊張。それを良い方向に伸ばしてやりたいと思うのだった。

「急いで食事してらっしゃいね。あと十五分よ」

「止めておきます。大丈夫ですから」
「何言ってるの。いつ何が起きるか分からないの。食事も添乗員の仕事よ」

食べている友香の横で、支払いクーポンを切り、草津のホテルに、部屋割

りと到着予定を連絡する。友香は箸を遣いながら、ミチルの仕事を見ている。

宴会が終り、部屋に戻ると翔からの電話が鳴った。ツインの部屋から、友香がさり気なく出て行く。

翔が、土曜の午後から日曜にかけて、休暇を取れという。

「強引ね」

と言うのに、

「命がけだ」

と答えた。

「じゃあ、私も命がけで休暇を取るわ。会社には、死んだと思つて貰うから」

翔は、声を出して笑った。翔の笑い声は、ミチルの胸をひたひたと満たす。鼻の奥がツンと痛んだ。一時に迎えに行くと言つたけれど、何処へ行くのと聞かなかつた。

別室に食事の用意がされていた。

仲居がビールを勧めたが、断つた。

「係長、飲まないんですか」

「たまには飲むわよ、プライベートの時にね。今は仕事申だと思つているの。夜中にだつて、何かあるか分からないもの」

友香は頷いた。

仲居が出て行くと、友香が体を寄せてきた。

「さっきの待ち受け、いきものがかりですよ。カレシですか？」

「まあね」

ミチルは思わせ振りに頷く。

「素敵。多分そうじゃないかと思つたん『今走り出せば』って、恋人たちの歌だもの。わたし、この歌だーいいき」

——僕達が出逢つた限られた日々の中で——

小さな声で歌い出した。澄んだ綺麗な声をしている。

子供を持たないミチルに実感はないが、早く結婚したら、友香くらいの娘がいても不思議はない。この歌詞も、自分と友香では、また違う意味で感動を呼んでいるのだと、艶のあるピンクの唇を見詰めた。

命がけだと言った翔に応えるために、ミチルも今週の予定を、詰めてこなさなければならぬ。

明日の予定と業務日誌を友香に確認させ、今日はこれで終わりと肩を叩く。「売店でもお風呂でも、好きにしてもね。添乗員だと意識していれば、大丈夫よ」

友香の瞳が輝いた。

「探検してきまーす」

晴れやかな声で、部屋を出て行く。上司と朝から夜まで、顔を突き合わせていたのでは、ストレスが溜まったのではないかと、同情した。

静かになった部屋で、明後日からの

予定を立て始めた。シーズンが終りに近づいているとはいえ、初詣のチラシから、春の企画書を纏めなければならぬ。

事務所に残っている事務員に、資料を集めるように言っている。次のコースを友香に作らせたらしめたい。

添乗の経験もしたし、教えたら良い片腕になってくれそうな気がする。出来た行程を基に、教えながら変更や訂正をする。仕事を覚えさせ、自分がフル活動するには一番良い考えだと、ミチルは大きく伸びをした。

土曜日、連日の残業で、目覚ましが鳴ってもまだ眠い。

翔が迎えに来る日だと気付いて、飛び起きた。目の上が浮腫んでいる。

タオルを電子レンジで温め、水で絞った冷たいタオルと交互に押し当て、すっきり目覚めた。心が弾んでい

る。鏡に映った素顔が、笑顔になっているのが恥ずかしい。自分の心が素直になっっているのが分かる。

昨日の帰り道、ビルの間の月を見た。翔の部屋にあった弁当箱を、一瞬思い浮べたけれど、何も聞かないで置こうと思った。そんなことは何でもない。命がけの翔に会うんだもの。

薄手のウールのワンピースに、朱い実の付いたブローチを着けた。口紅の色によく映る。七センチのヒールを履く。

翔の車が止まった。

(了)